

# 果物への支出

- 家計調査（二人以上の世帯）結果より -

10月になり、様々な秋の味覚が店頭に並ぶ季節となりました。そこで今回は、果物への支出について家計調査結果からみてみましょう。

## 生鮮果物の購入量は20年間で減少

平成20年の1世帯当たりの生鮮果物の年間購入数量(kg)をみると、昭和63年<sup>注</sup>)に比べて「バナナ」を除くすべての品目で減少しており、生鮮果物全体の購入量は7割弱となっています(図1)。

## 季節感が薄らいでいる「なし」と「かき」

次に、秋の果物である「なし」と「かき」について、1世帯当たりの年間支出金額に対する月別割合をみると、平成20年は昭和63年<sup>注</sup>)に比べて支出の最も多い「旬」の月の割合は低下し、前後の月の支出割合が上昇しています。このことから、購入する月が平準化され、昔より季節感が薄らいでいることがうかがえます。一方で、購入数量が増加している「バナナ」をみると、月ごとの支出割合に大きな差はなく、昔も今も季節を問わず購入されていることがわかります(図2)。

## 60歳以上の世帯では約2割が贈答品

最後に、1世帯当たりの生鮮果物への年間支出金額を世帯主の年齢階級別にみると、70歳以上の世帯が最も多く、次いで60～69歳の世帯となっており、世帯主の年齢が高くなるほど支出金額が多くなっています。これを購入用途別(世帯内での消費のために購入するか、贈答品として世帯外の人のために購入するか)にみると、世帯主の年齢が低い世帯は、世帯内のための支出がほとんどであるのに対して、60～69歳及び70歳以上の世帯では、世帯外への贈答品としての支出が年間支出金額の約2割となっています(図3)。

注) 昭和63年は農林漁家世帯を除く結果である。

図1 生鮮果物の年間購入数量  
(昭和63年・平成20年)

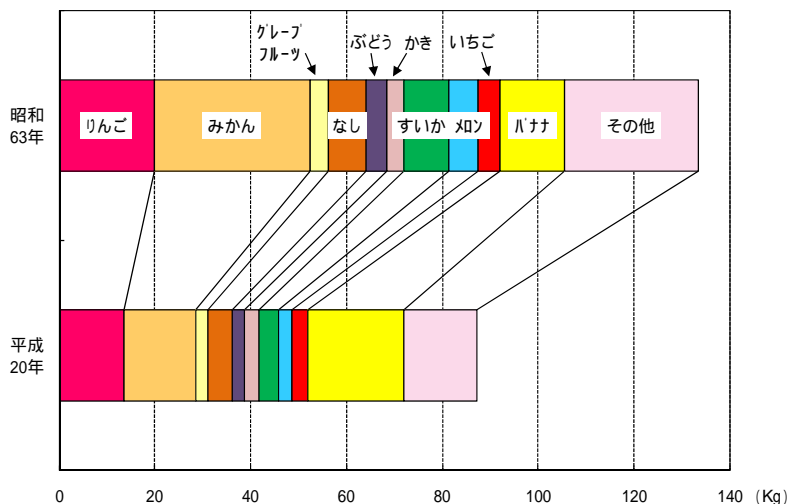


図2 年間支出金額に対する月別割合  
(昭和63年・平成20年)

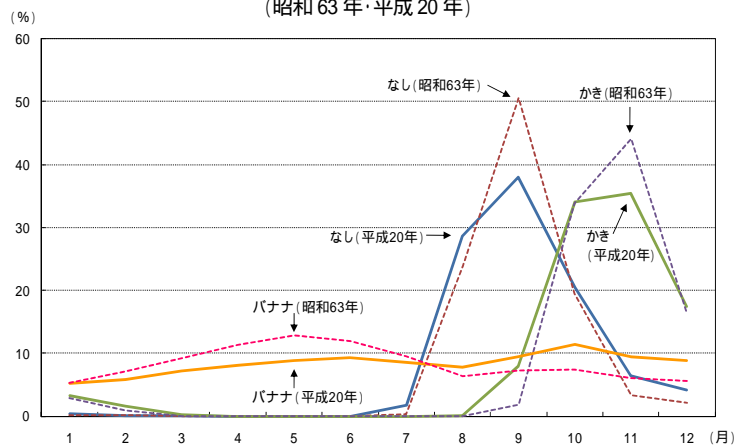


図3 生鮮果物の世帯主の年齢階級別支出金額  
(平成20年)

